



失敗と苦労の大切さ

今一番気になっていること。大学院の説明会への親の参加が最近増えて驚いている。高校ならまだしも大学院への進学を親が決めるのだろうか？ また、世の中はいたって便利で、至れり尽くせりの商品が出回っている。企業は生き残り戦略として、消費者のニーズをつかみ、それを満たす商品を生み出す。消費者はネット上のボタンを押すことで簡単に商品を手に入れることができる。ネットには様々な情報もあふれかえっている。少子化時代、大学も生き残り戦略として大学生のニーズをつかみ、ニーズに見合った学生にやさしく便利な環境を作らなければならないのかもしれない。

しかし待てよ、学生の多くは条件の良い就職先を求めているが、大学や大学院は基本的には学問と教育の場であり、就職予備校ではない。また、石の上にも三年というが、最近の社会問題として、新卒者の3割が3年以内に仕事を辞めるという。やさしく便利な環境は、大学の生き残り戦略としては有用なのかもしれないが、果たして、そのような環境は人材育成の場として優れているのだろうか？ 教員や家族が立ち回って学生にとって過度に都合の良い環境を作ると、彼らが自ら考えたり悩んだりする貴重な機会を奪うことになり、彼らの自主性や積極性を失わせることになる。人は概して窮地に立たないと頑張らない。また、ネットに情報はあふれているが、簡単に手に入る情報だけは、人間力やリーダーシップを培ううえでさほど役に立たないように思われる。

一方、我々生化学者・生命科学者の日々の営みは、順調

にゆくこともあるが失敗や困難もつきまとう。いうまでもなく、研究は未知なるものの探究で、すんなりと予想通りの結果が出るとはかぎらない。また、生化学的手法の多くは、いわゆるアナログかつローテク技術で、注意深く心配りをしながら実験をする必要があり、初心者は失敗をすることが多い。研究の舵取りも、試行錯誤の連続で、時にはプロジェクトの撤退が必要となる。このような研究は、多くの若者にとって、しんどく魅力的には見えないのかもしれない。

しかし、科学的な研究過程において、失敗をすること自体はけっして悪いことではない。むしろ、失敗してその結果を自ら分析し、考えや手法を改善し続けることで、よりよい成功につながるがよくある。実験手技における失敗も、手法の原理を深く理解するための材料として役に立てることができる。時には、対象を探るために敢えて失敗しそうな実験をすることも役に立つ。このように失敗を分析し改善材料として次にフィードバックするという過程をへて得られた成功は、たとえ小さな成功であっても、学生の創造力を養うための貴重な成功体験となる。また、時には困難さのためにプロジェクトを撤退することがあるかもしれないが、その際に考えたり悩んだりしたことは往々にして別の機会に役に立てることができる。このような体験は、アカデミアや企業のような場面で問題を解決するための指針や自信、さらには人間力の育成につながる。最近あらためて、学生に研究を通じて失敗や困難からも学ぶことを体験してほしいと考えている。

以下は、小欄を読んでいる若い方へのメッセージです。難しいと思ってもまずは続けてみる。続けていると案外うまく乗り切れることがある。予想外の新しい発想や面白い展開につながることもある。また頑張っていれば、天使が降りてきてあなたの背中をそっと押してくれることがある。新しい知見を得ることはもちろんですが、このような体験は、研究者としての大きな喜びの一つです。

(ひぐらし)